本調査で使用した質問紙の構成は、以下の通りである。

○事前アンケート

１)フェイスシート：性別、年齢、職業・立場をたずねた。

２)学校評価の経験についてたずねる項目

幼稚園や幼稚園以外の学校評価に関わった経験があるかどうかたずねた。

３)学校関係者評価委員に選出された理由の認知をたずねる項目

自分が学校関係者評価委員に選出されたのはなぜだと思うかたずねた。

４)学校関係者評価にかかわる感情・動機づけに関する項目

学校関係者評価委員に選出された際に感じた、学校関係者評価に対する不安感や負担感、幼稚園にかかわっていく意欲等をたずねる９項目について、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の５件法で回答を求めた。

５)幼稚園教育に関する項目

幼稚園教育についての理解度（自己認知)、幼稚園や子どもの育ちへの関心、幼稚園や子どもと関わった経験をたずねる15項目について、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の５件法で回答を求めた。

６)学校評価・学校関係者評価についてたずねる項目

学校評価や学校関係者評価についての理解度（自己認知）をたずねる９項目について、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の5件法で回答を求めた。

事前アンケートは、Ｐ群、Ｎ群とも同じ内容となっている。

○研修１後アンケート

１)フェイスシート：事前アンケートとのマッチングに正確を期すため、再度同じ項目をたずねた。

２)幼稚園教育に関する項目・学校関係者評価にかかわる感情・動機づけに関する項目

事前アンケート５)の15項目のうち、幼稚園や子どもと関わった経験をたずねる項目を除いた12項目と、事前アンケート４)のうち、学校関係者評価に対する不安をたずねる２項目、幼稚園に関わる意欲に関する２項目、合計16項目について「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の５件法で回答を求めた。

３)DVD教材についてたずねる項目

DVD教材「どんなところ？幼稚園」について、わかりやすさなどを「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の５件法で回答を求めた。

○研修２後アンケート

１)フェイスシート：事前アンケート、研修１後アンケートと同様の項目である

２)学校評価に関する項目・学校関係者評価にかかわる感情・動機づけに関する項目

事前アンケート４）のうち、学校関係者評価に対する不安感・負担感をたずねる３項目、幼稚園に関わる意欲・学校関係者評価に関わる責任感をたずねる項目それぞれ１項目、事前アンケート６）の９項目に、「これからも幼稚園の応援団として学校評価にかかわりたい」を加えた全16項目について、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の５件法で回答を求めた。

３)DVD教材についてたずねる項目

DVD教材「「学校評価」とは」について、わかりやすさなどを「非常にそう思う」から

「全くそう思わない」の５件法でたずねた。

○最終アンケート（Ｐ群）

１)フェイスシート：事前アンケート、研修１後・研修２後アンケートと同様の項目をたずねた。

２)研修プログラム教材についてたずねる項目

研修１、研修２の教材について、わかりやすさなどについてたずねる９項目について、「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の５件法で回答をもとめた。

３)評価方法についてたずねる項目

今回の学校関係者評価プログラムの感想などについてたずねる７項目について「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の５件法で回答をもとめた。

４)学校関係者評価を終えた時点での学校関係者評価にかかわる感情・動機づけに関する項目

事前アンケート４)のうち、学校関係者評価に対する不安感・負担感・責任感、幼稚園にかかわる意欲をたずねる９項目に、「今後も学校関係者評価以外のことでも、園運営に協力したい」を加えた全10項目について、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の５件法で回答をもとめた。

５)幼稚園教育に関する項目

事前アンケート５)のうち、幼稚園・それ以外の学校への訪問経験をたずねる２項目を除いた13項目について、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の５件法で回答を求めた。

○最終アンケート（Ｎ群）

１)フェイスシート：事前アンケートと同様の項目をたずねた。

２)学校関係者評価に関わって思うことについてたずねる項目

事前アンケート４)と同様の９項目について、同じく５件法でたずねた。

３)幼稚園教育に関する項目

事前アンケート５)のうち、幼稚園や子どもと関わった経験をたずねる３項目を除いた。12項目について、同じく５件法でたずねた。

４)学校評価・学校関係者評価についてたずねる項目

事前アンケート６)と同様の９項目について、同じく５件法でたずねた。

⑶　結果と考察

各アンケートの回収園数、データ協力者数は、Ｐ群〔事前アンケート：37園（163名)、研修１後アンケート：37園（162名)、研修２後アンケート：32園（141名)、最終アンケート：27園（119名)〕、Ｎ群〔事前アンケート：30園（144名)、Ｎ群最終アンケート：22園（112名)〕であった。

①事前アンケートの集計

１）学校関係者評価委員の属性

学校関係者評価委員の性別、年齢、職業・立場の内訳は、図２-３-２、２-３-３、２-３-４に示すとおりである。性別、年齢について、Ｐ群とＮ群をχ^2検定で比較したところ、有意な差は見られなかった（性別：$\chi^2(1)=.002$, n. s.、年齢：$\chi^2(4)=2.581$, n. s.）。

図２-３-２　性別

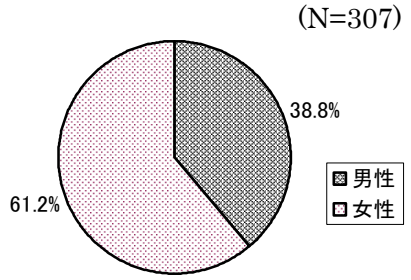


図２-３-３　年齢

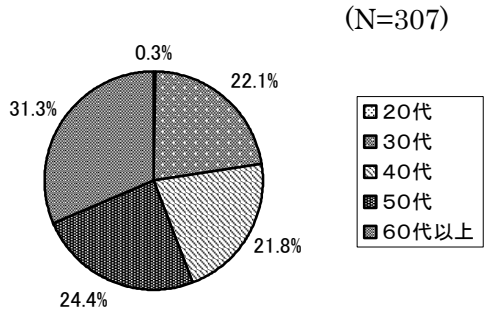
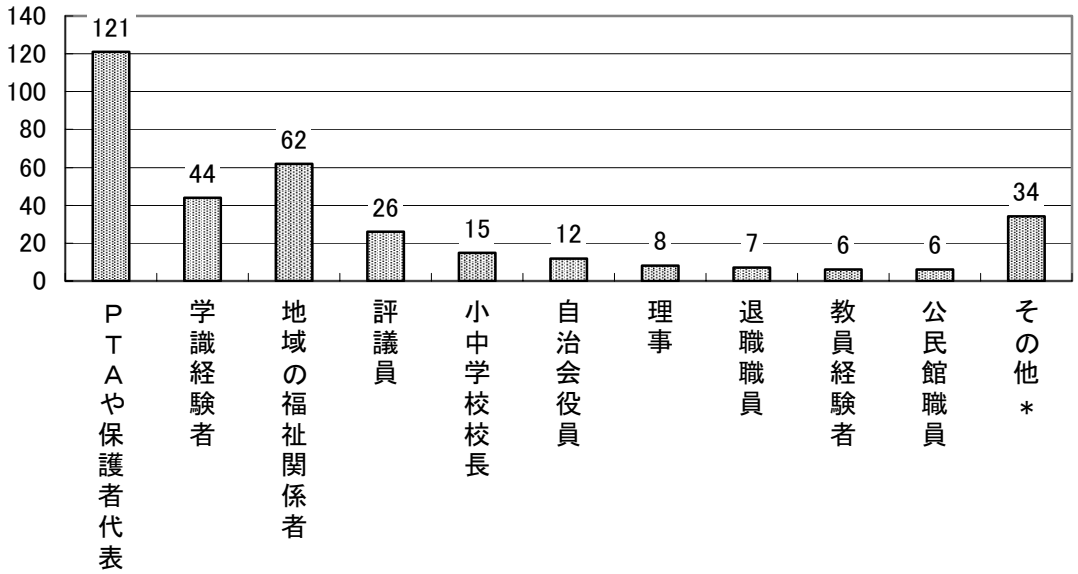


図２-３-４　学校関係者評価委員の職業あるいは立場(N=307, 複数回答あり)



*その他の内訳

郵便局長　1
卒園児保護者で市議　1
学校案内等作成の写真業者　2
出入りの印刷業者　1
地域子育て支援代表　1
交通安全ボランティア　1
保育・子育て支援カウンセラー　1
後援会役員　1
同窓会幹事　3
他園園長　1
預かり保育担当保育者　2
読み語りボランティア　1
園医　1
市職員（教育委員会）　1
子育て支援センタースタッフ　2
課外保育（英語）担当者　1
幼稚園職員　1
監事　1
助産師　1
不明・明確な言及なし　11

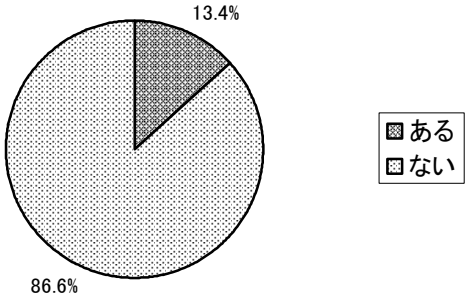
職業・立場のうち、数の多かった「PTA・保護者代表」「学識経験者」「地域の福祉関係者」「評議員」についても同様にχ^2検定を行ったところ、「評議員」のみ５％水準で有意差が見られ、Ｐ群よりＮ群の方が多かった（保護者：$\chi^2(1)=.766$, n. s. 学識経験者：$\chi^2(1)=2.286$, n. s.、地域福祉関係者：$\chi^2(1)=.093$, n. s.、評議員：$\chi^2(1)=3.906$, $p<.05$）。今回の調査対象者については、Ｐ群に比べＮ群の方に評議員が多く含まれていたことがわかった。

②学校評価の経験

１）幼稚園における学校評価にかかわった経験

「過去に、幼稚園における学校評価にかかわった経験がありますか」という問いに対する、ある・ない回答の割合は、図２-３-５のとおりである。過去にも幼稚園における学校評価にかかわった経験があるのは、全体の13.4％であった。

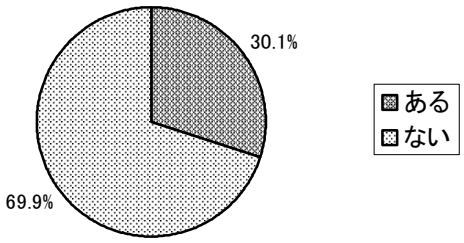
図２-３-５　幼稚園における評価に関わった経験
N=307



２）幼稚園以外の学校評価にかかわった経験

「過去に、幼稚園以外の学校の評価にかかわったことがありますか」という問いに対する、ある・ない回答の割合は、図２-３-６のとおりである。過去に幼稚園以外の学校における学校評価にかかわった経験があるのは、全体の30.1％であった。

図２-３-６　幼稚園以外の学校評価に関わった経験
(N=307)

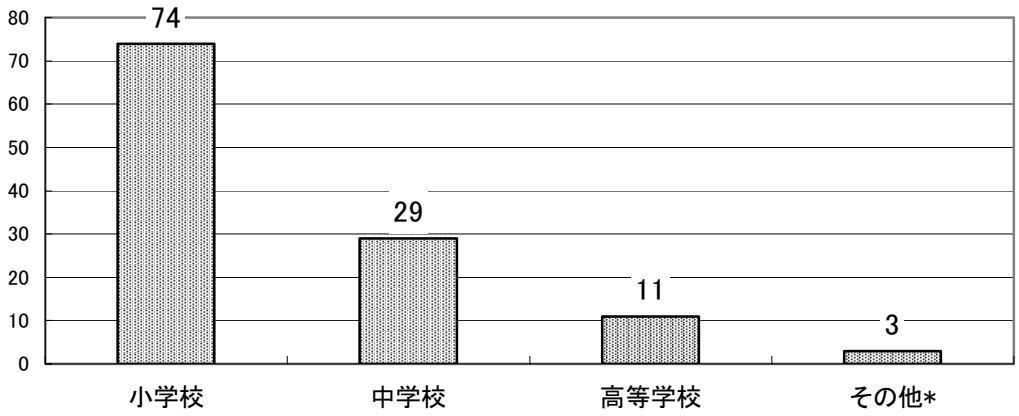


幼稚園における学校評価・幼稚園以外の学校における学校評価にかかわった経験について、Ｐ群とＮ群をχ^2検定にて比較したが、いずれも有意な差は見られなかった（幼稚園：$\chi^2(1)=.414$, n. s.、幼稚園以外：$\chi^2(1)=.063$, n. s.）。

３）学校評価にかかわった学校種

幼稚園以外の学校評価にかかわった経験があると回答した学校関係者評価委員92名に対し、かかわった学校種をたずねた。小学校が最も多く（72回答）、次いで中学校（29回答）、高等学校（11回答）となっている（図２－３－７）。「その他」の3回答の内訳は、保育園、専門学校、養護学校であった。

図２－３－７ 評価に関わった学校種（N=92 複数回答あり）



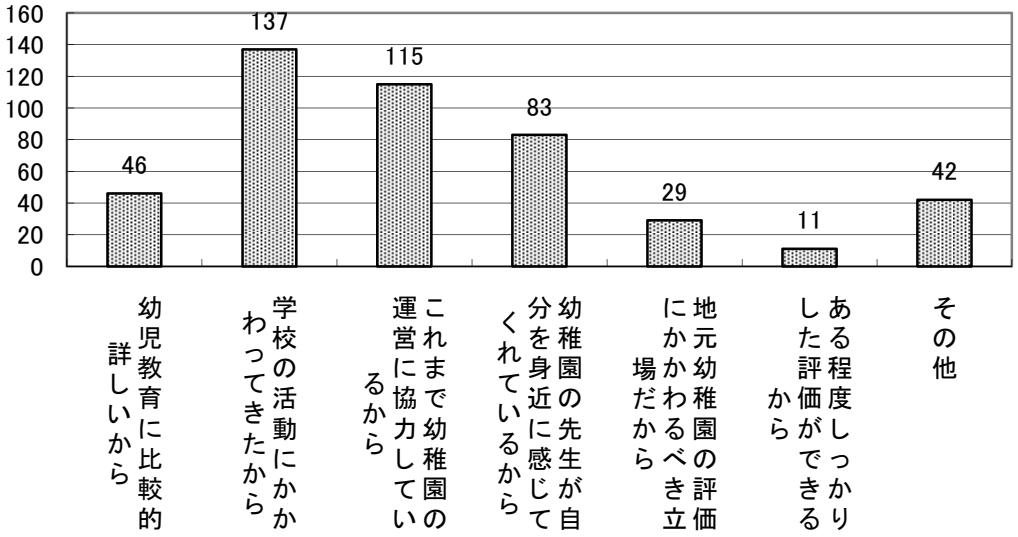
（*その他の内訳：保育園、専門学校、養護学校）

③学校関係者評価委員に選出された理由の認知

各学校関係者評価委員が、自分が評価委員に選出された理由について、どのように考えているかたずねた。最も多かったのが「学校の活動にかかわってきたから」（137回答：全体の44.8%）で、次いで多かったのが「これまで幼稚園の運営に協力しているから」（115回答：全体の37.6%）「幼稚園の先生が自分を身近に感じてくれているから」（83回答：全体の27.1%）であった。「幼児教育に比較的詳しいから」「地元幼稚園の評価にかかわるべき立場だから」「ある程度しっかりした評価ができるから」は、それぞれ全体の15.0%、9.5%、3.6%にとどまり、学校関係者評価委員の多くは、学校評価委員に求められる知識をもっていることよりも、これまでの幼稚園とのかかわり、それに基づく幼稚園教諭との親しい関係を、選出された理由と考えていることが示された（図２－３－８）。「その他」49回答の内訳は、自由記述欄に記入なしの無回答が21、記入があったのは19回答であり、いずれも自分の職業・立場を理由としてあげていた（例：「第三者委員」だから、幼稚園の役員をしているから、公民館主事という立場から、など）。

図２－３－８ 学校関係者評価委員の選出理由の認知

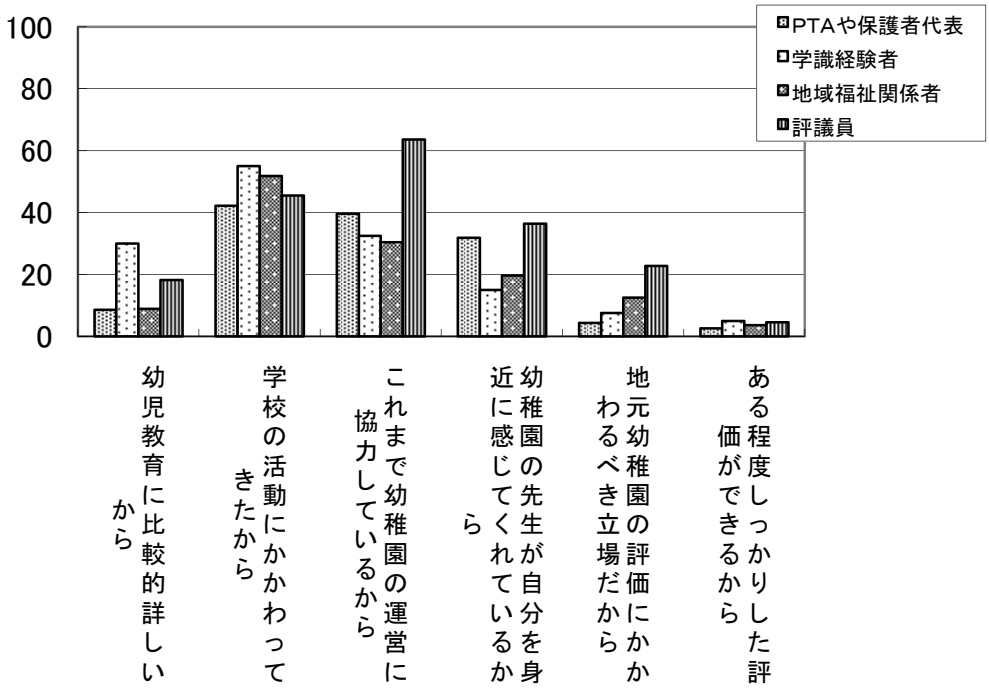
(N=307　複数回答あり



この選出理由の認知が、関係者評価委員の職業・立場で異なるのかどうかを検討した。それぞれの職業・立場別に理由の選択率を集計したのが図２－３－９である。

図２－３－９ 関係者評価委員の職業・立場別選出理由の認知

(N=307)



どの職業・立場でも選択率が高いのが「学校の活動にかかわってきたから」であり（ＰＴＡ・保護者42.2%、学識経験者55.0%、地域福祉関係者51.8%、評議員45.5%）、どの職業・立場

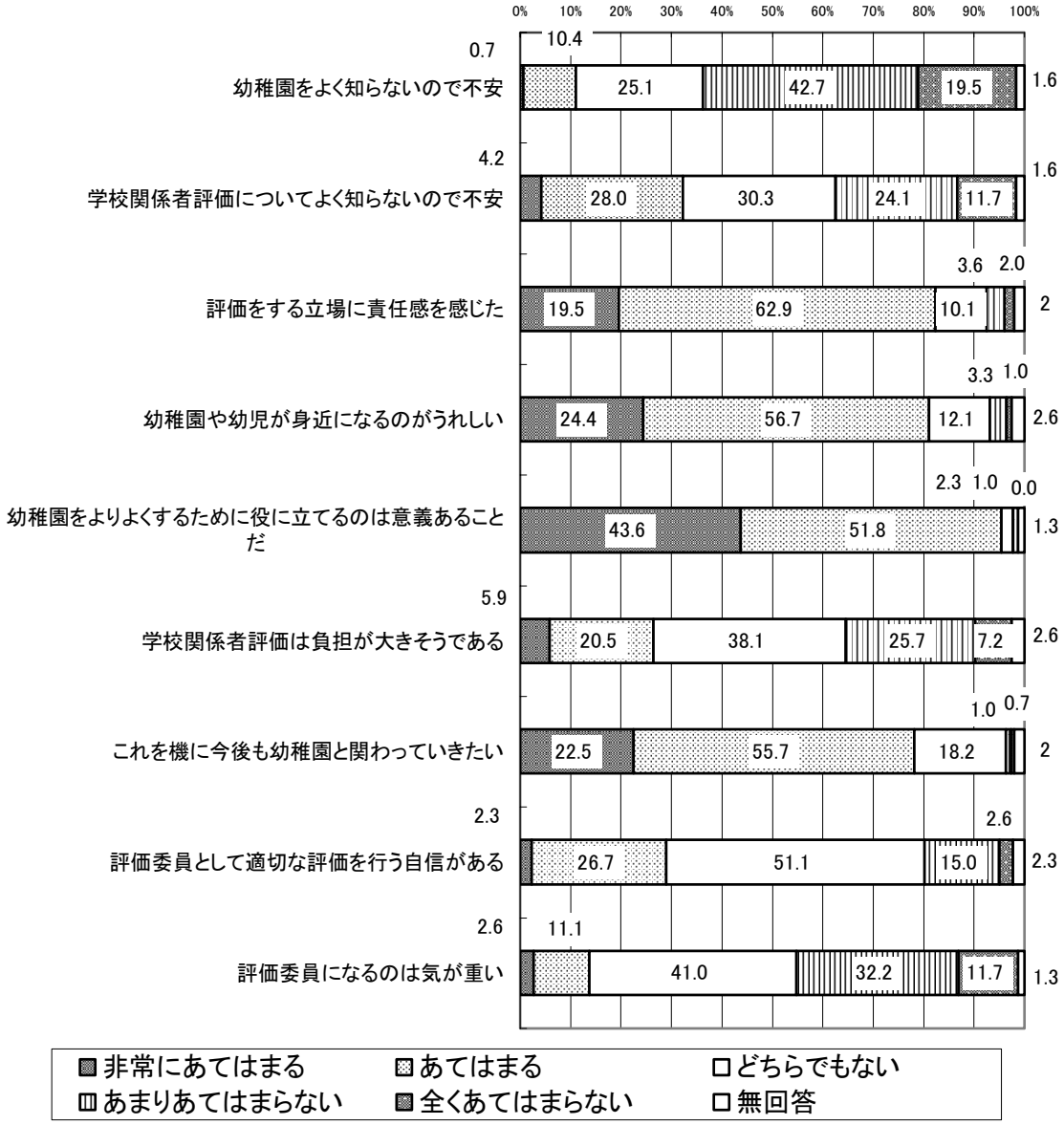
でも選択率が低いのが「ある程度しっかりした評価ができるから」であった（ＰＴＡ・保護者2.6%、学識経験者5.0%、地域福祉関係者3.6%、評議員4.5%）。それぞれの職業・立場の特徴を見てみると、「学識経験者」は「幼児教育に比較的詳しいから」（30.0%）が、「評議員」は「これまで幼稚園の運営に協力しているから」（63.6%）「幼稚園の先生が自分を身近に感じてくれているから」（36.4%）「地元幼稚園の評価にかかわるべき立場だから」（22.7%）が他に比べて高くなっている。このことから、今回調査において、自分の職業・立場として「学識経験者」に丸をつけた学校関係者評価委員には、幼児教育に関する知識を持つ専門家が多く含まれており、そうした専門的知識をもつ者としてこれまで園の活動にかかわってきたことが、学校関係者評価委員に選出された理由であるととらえていることが考えられる。また、評議員は、これまで評議員会に参加し、園とかかわってきたことで、園教職員との心理的距離が比較的近くなっており、そうしたこれまでの園とのかかわりと身近さ、そして評議員という立場そのものが、学校関係者評価委員を依頼された理由であるととらえているものと考えられよう。これらの職業・立場に比べ、「ＰＴＡ・保護者」には、50%を超える回答率の理由がなく、“これが自分が学校関係者評価委員を依頼された理由である”と、強く認識している理由がないことがうかがえる。保護者にとっては、これまで通園する子どもの親として「学校の活動にかかわってきた」こと、「園の運営に協力してきた」こと、“親と先生”としての関係を築いてきたことの延長線上に、学校関係者評価への参加があるものと考えられよう。このことは、「地元幼稚園の評価にかかわるべき立場だから」の選択率にも表れている。全般的に選択率は低いが、中でも保護者が最も低く（4.3%）、学校評価というものが、自分たちが行なうものである、との認識はほとんどもたれていないといえよう。これは、「学識経験者」についても同じであり（7.5%）、幼稚園が学校関係者評価を行なうにあたり、委員を依頼する可能性の高い職業・立場にある地域住民でも、自分たちが参加して行なうものであるとの認識は、まだ一般的にもたれていないものと思われる。

④学校関係者評価にかかわる感情

学校関係者評価委員に選出された際に感じた不安感、負担感、意欲等に関する９項目に対する「非常にあてはまる」～「全くあてはまらない」回答の比率を示したのが図２－３-10である。「非常にあてはまる」と「あてはまる」を合わせた「あてはまる」回答は、「評価する立場に責任感を感じた」（「非常にあてはまる」+「あてはまる」82.4%）、「幼稚園や園児が身近になるのがうれしい」（81.1%）、「幼稚園をよりよくするために役に立てるのは意義あることだ」（95.4%）、「これを機に今後も幼稚園とかかわっていきたい」（78.2%）といった、幼稚園や学校関係者評価に積極的にかかわっていく姿勢に関する項目で高くなっており、学校関係者評価委員の意欲の高さがうかがえる。

図２－３-10 学校関係者評価にかかわる感情

(N=307)



各項目への回答を、「非常にあてはまる」を５点、「あてはまる」を４点、「どちらでもない」を３点、「あまりあてはまらない」を２点、「全くあてはまらない」を１点として得点化した。各項目の平均値、標準偏差、最小値・最大値は表２－３－２の通りである。「幼稚園をよく知らないので不安である」「学校関係者評価についてよく知らないので不安である」「学校関係者評価は負担が大きそうである」「学校関係者評価委員になるのは気が重い」といった、学校関係者評価に対する不安感や負担感に関する項目は、いずれも3.0以下であり（それぞれ、2.29、2.89、2.92、2.60)、こうしたネガティブな感情は、全般的にあまり高くないことがわかる。

表２-３-２　事前アンケート

学校関係者評価委員の学校関係者評価にかかわる感情　各項目の得点の平均値・標準偏差と得点範囲[1]

	Mean	S.D.	Min-Max[2]
1.幼稚園をよく知らないので不安である	2.29	0.93	1-5
2.学校関係者評価についてよく知らないので不安である	2.89	1.08	1-5
3.評価する立場に責任感を感じた	3.96	0.79	1-5
4.幼稚園や幼児が身近になるのがうれしい	4.03	0.77	1-5
5.幼稚園をよりよくするために役に立てるのは意義あることだ	4.40	0.59	2-5
6.学校関係者評価は負担が大きそうである	2.92	1.00	1-5
7.これをきっかけに今後も幼稚園とかかわっていきたい	4.00	0.72	1-5
8.「学校関係者評価委員」として適切な評価を行なう自信がある	3.11	0.78	1-5
9.学校関係者評価委員になるのは気が重い	2.60	0.93	1-5

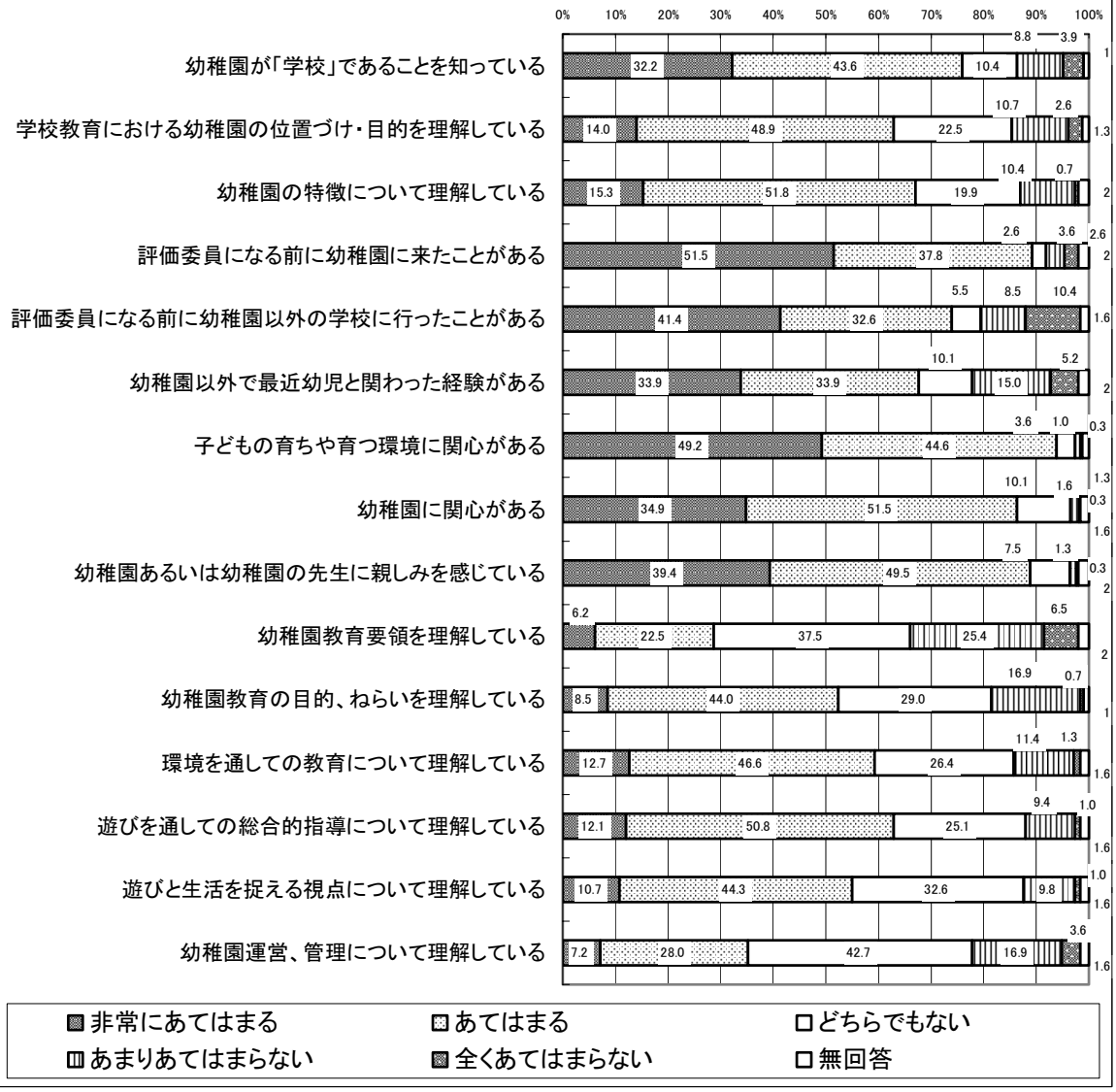
*1　N=307

*2　最小値と最大値を示す（以下同様に表記する）

⑤幼稚園教育に関する項目

幼稚園教育についての理解度（自己認知）、幼稚園や子どもの育ちへの関心、幼稚園や子どもとかかわった経験をたずねる15項目に対する「非常にあてはまる」～「全くあてはまらない」回答の比率を図２-３-11に示した。「全般的に、子どもの育ちや育つ環境に関心をもっている」「幼稚園に関心をもっている」「幼稚園あるいは幼稚園の先生に親しみを感じている」といった、園や保育者、子どもへの関心・親しみが、全般的に高いことがうかがえる（「非常にあてはまる」+「あてはまる」:「子どもの育ちや育つ環境…」93.8%、「幼稚園に関心」86.4%、「園・先生に親しみ」88.9%）。

図２－３-11 幼稚園・幼稚園教育に関する質問 (N=307)



また、各項目への回答を、前項の学校関係者評価にかかわる感情に関する項目と同様の方法で得点化した。各項目の平均値、標準偏差、最小値・最大値は表２－３－３の通りである。ほとんどの項目が３から3.5以上となっていて、全般的に得点が高くなっている。学校関係者評価委員の、幼稚園教育に関する自己認知による理解度、幼稚園や子どもの育ちへの関心は高く、幼稚園や子どもとかかわった経験もある程度持っていると考えられる。一方で「幼稚園教育要領を理解している」だけは平均値2.96と他の項目の平均値と比べて低めであり、幼稚園教育の理解面については、多くの評価委員にとってあまり自信がないと感じられていることがうかがえる。

表２－３－３　幼稚園教育理解度（自己認知）・幼稚園や子どもの育ちへの関心・幼稚園や子どもとかかわった経験　各項目の得点の平均値・標準偏差と得点範囲[1]

	Mean	S.D.	Min-Max
1.「幼稚園」は，学校教育法に規定される「学校」であることを知っている	3.92	1.07	1-5
2.学校教育における「幼稚園」の位置づけと目的を理解している	3.62	0.95	1-5
3.幼稚園の特徴について理解している	3.72	0.88	1-5
4.関係者評価委員になる前に幼稚園に来たことがある	4.35	0.91	1-5
5.関係者評価委員になる前に幼稚園以外の学校に行ったことがある	3.87	1.33	1-5
6.幼稚園以外で最近，幼児とかかわった経験がある	3.78	1.22	1-5
7.全般的に子どもの育ちや，子どもが育つ環境に関心をもっている	4.43	0.65	1-5
8.「幼稚園」に関心をもっている	4.21	0.71	1-5
9.「幼稚園」あるいは「幼稚園の先生」に親しみを感じている	4.29	0.69	1-5
10.「幼稚園教育要領」を理解している	2.96	1.00	1-5
11.「幼稚園教育」の目的やねらいについて理解している	3.43	0.89	1-5
12.「環境を通しての教育」を理解している	3.59	0.90	1-5
13.「遊びを通しての総合的指導」について理解している	3.65	0.85	1-5
14.遊びと生活をとらえる視点について理解している	3.55	0.85	1-5
15.幼稚園の運営や管理について理解している	3.19	0.93	1-5

*1　N=307

⑥学校評価・学校関係者評価についてたずねる項目

学校評価や学校関係者評価についての理解度（自己認知）をたずねる９項目について、各項目への「非常にあてはまる」～「全くあてはまらない」回答の比率を図２－３-12に示した。また、各項目への回答を、前項までと同様の方法で得点化した。各項目の平均値、標準偏差、最小値・最大値は表２－３－４の通りである。

図２－３-12 学校評価・学校関係者評価に関する質問 (N=307)

表２−３−４　学校評価・学校関係者評価に関する理解度（自己認知）
各項目の得点の平均値・標準偏差と得点範囲[1]

	Mean	S.D.	Min-Max
学校評価という言葉を知っている	3.57	1.24	1-5
幼稚園においても学校評価が行なわれていることを知っている	3.12	1.33	1-5
幼稚園教育における学校評価の必要性について知っている	3.12	1.11	1-5
学校関係者評価の目的や意義についてわかっている	3.17	1.08	1-5
学校関係者評価委員の役割と協力する内容についてわかっている	3.09	1.03	1-5
学校関係者評価が教育でどのように活用されるのかがわかっている	2.89	1.04	1-5
自己評価と学校関係者評価との関係がわかっている	2.83	1.03	1-5
評価する対象や内容について理解している	2.94	1.00	1-5
学校関係者評価の実施スケジュールについて理解している	2.81	1.10	1-5

*1　N=307

「非常にあてはまる」と「あてはまる」を合わせた「あてはまる」回答が50％を超えている項目が「学校評価という言葉を知っている」一つしかなく、各項目の平均値も概ね2.8から3.2程度である。前項の「幼稚園教育の理解」と比較し、学校関係者評価の理解度についての自己認知は低めである。

ここまでの集計から、学校関係者評価委員は、これまで学校評価にかかわった経験がない者も多く、また学校関係者評価が自分が参加するべき学校評価であるとの認識もあまりもってはこなかったことがうかがえる。しかし、学校関係者評価にかかわることへの不安感や負担感はそれほど高くなく、幼稚園や子どもの育ちに高い関心をもち、幼稚園のために役に立てることに意義を感じ、これをきっかけに今後も幼稚園にかかわっていきたいという高い意欲をもっていることがうかがえる。一方で、幼稚園教育要領の理解や、学校関係者評価そのものについての理解にはあまり自信がないこともうかがえ、この点が研修プログラムを受けることで改善されるかどうかが、研修プログラムの効果を検討するにあたり重要なポイントになるといえる。

⑷　研修の有効性の検討

①研修１「どんなところ？幼稚園」の有効性の分析

１）研修１後の幼稚園に関する理解の変化

幼稚園・幼児教育の考え方など、幼稚園教育の特徴・目的について解説した研修１を受けたことによって、学校関係者評価委員の幼稚園教育に関する理解度（自己認知）に、変化が生じたかどうかを検証する。

幼稚園教育に関する質問項目15項目のうち、経験の有無をたずねる３項目（「４．関係者評価委員になる前に幼稚園に来たことがある」、「５．関係者評価委員になる前に幼稚園以外の学校に行ったことがある」「６．幼稚園以外で最近、幼児とかかわった経験がある」）と、天井効果の見られた２項目（「７．全般的に子どもの育ちや、子どもが育つ環境に興味をもってい

る」、「９．幼稚園あるいは幼稚園の先生に親しみを感じている」）を除いた10項目を用い、主因子法による因子分析を行った。その結果、初期の固有値は5.60、1.04、0.84、0.61…と変化しており、因子２までの累積寄与率は66.4%であったため、２因子構造を想定するのが適当であると判断し、因子数を２と指定して、再度、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、項目「８.幼稚園に関心をもっている」は両因子とも因子負荷量が低かったため（因子１：.27、因子２：.18）、この項目を除いて再度同様の方法による因子分析を行った。各項目の因子負荷量は、表２-３-５のとおりである。因子１に負荷量の高かった項目は、「10. 幼稚園教育要領を理解している」、「11. 幼稚園教育の目的やねらいについて理解している」、「13. 環境を通しての教育を理解している」、「14. 遊びを通しての総合的指導について理解している」、「15. 遊びと生活を捉える視点について理解している」、「16. 幼稚園の運営や管理について理解している」の６項目であり、幼稚園教育の目的、特徴の理解に関する項目で構成されていたため「幼稚園教育の理解」と命名した。因子２に負荷量の高かった項目は、「１.幼稚園は、学校教育法に規定される学校であることを知っている」、「２.学校教育における幼稚園の位置づけと目的を理解している」、「３.幼稚園の特徴について理解している」の３項目であり、学校として幼稚園を理解することに関する項目で構成されていたため、「学校としての幼稚園の理解」と命名した。各因子のα係数を算出したところ、因子１は.917、因子２は.770と良好な値が得られた。

表２-３-５　幼稚園・幼稚園教育についてたずねる項目　因子分析結果

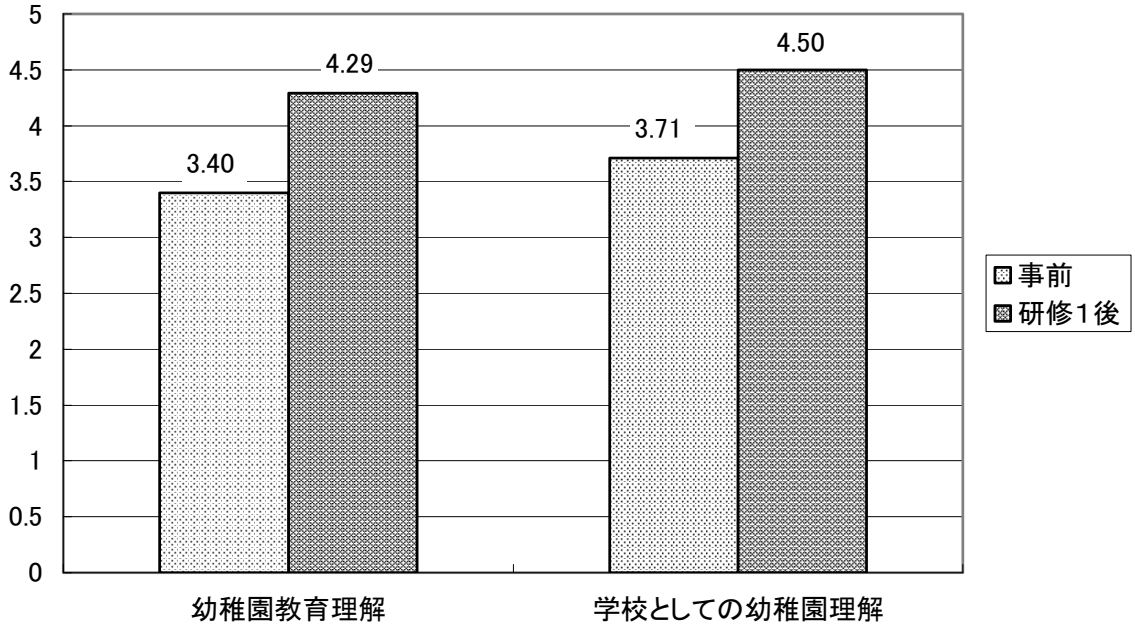
項目	因子1	因子2	共通性
第1因子　幼稚園教育の理解			
環境を通しての教育について理解している	.933	−.093	.761
遊びと生活を捉える視点について理解している	.919	−.072	.759
遊びを通しての総合的指導について理解している	.879	−.027	.742
幼稚園教育の目的、ねらいを理解している	.731	.154	.712
幼稚園運営、管理について理解している	.647	.080	.495
幼稚園教育要領を理解している	.597	.124	.473
第2因子　学校としての幼稚園の理解			
学校教育における幼稚園の位置づけ・目的を理解している	.012	.942	.902
幼稚園が「学校」であることを知っている	−.083	.590	.288
幼稚園の特徴について理解している	.332	.503	.591
信頼性係数α	.917	.770	

二つの下位尺度の各項目の得点を加算した後、項目数で除算し、それぞれ『幼稚園教育理解』得点、『学校としての幼稚園理解』得点とした。この２得点について、事前アンケートと研修１後アンケートの得点の比較のため対応のあるt検定を行ったところ、有意な差が認められ、いずれも事前アンケートより研修１後アンケートの得点の方が高くなっていることが分かった（幼稚園教育理解得点；$t(157)=16.556, p<.01$、事前3.40(.79)＜研修１後4.29(.61)、学

校としての幼稚園理解得点;t(156)=11.22, p<.01、事前3.71(.78)＜研修１後4.50(.61)）（図２－３-13)。

図２－３-13 研修１後の幼稚園に関する理解の変化

(N=162)



２）研修１後の学校関係者評価にかかわる感情の変化

研修１を受けたことで、学校関係者評価委員の幼稚園・関係者評価にかかわる感情に変化が生じたのかどうかを検証する。

事前アンケートの学校関係者評価委員に選出された際に感じた不安感、負担感、意欲等に関する９項目のうち、研修１後アンケートと共通の４項目（「幼稚園をよく知らないので不安である」「学校関係者評価についてよく知らないので不安である」「幼稚園や幼児が身近になることがうれしい」「これをきっかけに今後も幼稚園とかかわっていきたい」）について、事前アンケートと研修１後アンケートの得点を比較するため、対応のあるt検定を行った。その結果、いずれの項目でも有意差が見られ、「幼稚園をよく知らないので不安である」（t(156)=1.95, p<.05）と「学校関係者評価についてよく知らないので不安である」（t(157)=4.30, p<.01）については、事前アンケートより事後アンケートの方が低く、「幼稚園や幼児が身近になるのがうれしい」（t(157)=4.27, p<.01）と「これをきっかけに今後も幼稚園とかかわっていきたい」（t(158)=4.80, p<.01）については、事前アンケートより事後アンケートの方が高くなっていることが分かった（表２－３－６）。

表２-３-６　研修１後の学校関係者評価にまつわる感情の変化（N=162）

	事前アンケート		研修1後アンケート		
	Mean	S.D.	Mean	S.D.	
幼稚園をよく知らないので不安である	2.32	0.94	2.12	1.14	事前＞研修1後*
学校関係者評価についてよく知らないので不安である	2.91	1.09	2.45	1.13	事前＞研修1後**
幼稚園や幼児が身近になるのがうれしい	3.92	0.82	4.22	0.73	事前＜研修1後**
これをきっかけに今後も幼稚園とかかわっていきたい	3.96	0.74	4.30	0.74	事前＜研修1後**

*p<.05

**p<.01

事前アンケートと研修１後アンケートを比較した結果から、研修１は、学校関係者評価委員の幼稚園・幼稚園教育についての理解を高め、関係者評価に臨む不安感を軽減し、幼稚園や幼児とのかかわりをポジティブにとらえる気持ちや今後の幼稚園とのかかわりへの意欲を高める効果があることが示唆された。

②研修２「学校関係者評価とは」の有効性の分析

１）研修２後の学校関係者評価の理解の変化

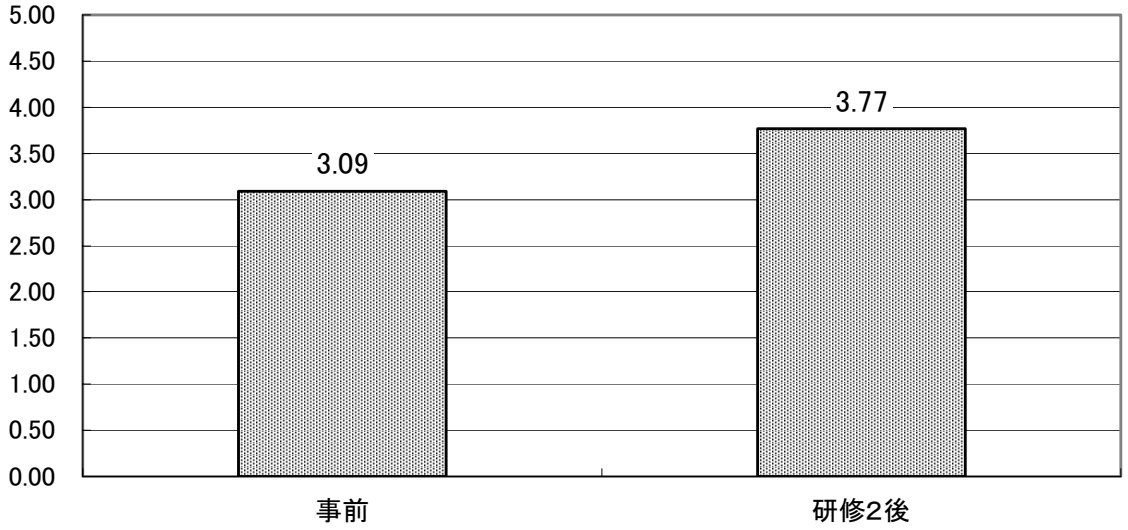
学校関係者評価の意義、目的や方法について解説した研修２を受けたことで、関係者評価委員の学校関係者評価に関する理解に変化が生じたかどうかを検証する。

事前アンケートの、学校関係者評価の理解についてたずねる９項目を用いて、主因子法による因子分析を行ったところ、初期の固有値は6.08、0.90、0.49…と変化しており、因子１で分散の67.56%を占めていたことから、一因子構造であると考えられた。そこで、９項目の得点を足し合わせたものを項目数で除算し、『学校関係者評価理解』得点を算出した。

この『学校関係者評価理解』得点について、事前アンケートの得点と研修２後アンケートの得点を比較するため、対応のあるt検定を行った。その結果、有意な差が見られ、事前アンケートよりも研修２後アンケートの方で得点が高くなっていることが分かった（t(133)=9.40, p<.01、事前3.09(.86)＜研修２後3.77(.61)）（図２－３-14)。

図２－３-14 研修２後の学校関係者評価理解の変化

(N=141)



２）研修２後の学校関係者評価にかかわる感情の変化

研修２を受けたことで、学校関係者評価委員の関係者評価にかかわる感情に変化が生じたのかどうかを検証する。

事前アンケートの、学校関係者評価委員に選出された際に感じた不安感、負担感、意欲等に関する９項目のうち、研修２後アンケートと共通の５項目（「学校関係者評価についてよく知らないので不安である」「評価をする立場に責任感を感じた」「学校関係者評価は負担が大きそうである」「「学校関係者評価委員」として、適切な評価を行う自信がある」「学校関係者評価委員になるのは気が重い」）について、事前アンケートと研修２後アンケートの得点に差があるのかどうかを検討するため対応のあるt検定を行った。その結果、「学校関係者評価についてよく知らないので不安である」のみ有意差が見られ、事前アンケートより研修２後アンケートの方で得点が低くなっていることが分かった（t(140)=3.569, p<.01、事前2.93(1.10)＞研修２後2.56(.92)）（表２－３－７）。

表２－３－７　研修２後の学校関係者評価にまつわる感情の変化

	事前アンケート		研修2後アンケート		
	Mean	S.D.	Mean	S.D.	
学校関係者評価についてよく知らないので不安である	2.93	1.10	2.56	0.92	事前＞研修2後**
評価をする立場に責任感を感じた	3.96	0.83	3.89	0.91	n.s.
学校関係者評価は負担が大きそうである	3.01	0.98	2.97	0.94	n.s.
評価委員として適切な評価を行う自信がある	3.09	0.75	3.13	0.74	n.s.
評価委員になるのは気が重い	2.64	1.02	2.60	0.93	n.s.
幼稚園をよりよくするために役に立てるのは意義あることだ	4.39	0.60	-	-	-
学校評価を通して幼稚園のために役に立てるのは意義あることだ	-	-	4.37	0.55	-
これをきっかけに今後も幼稚園とかかわっていきたい	3.96	0.75	-	-	-
これからも幼稚園の応援団として学校評価にかかわりたい	-	-	3.94	0.82	-

**p<.01

また、事前アンケート項目「幼稚園をよりよくするために役にたてるのは意義あることだ」と「これをきっかけに今後も幼稚園とかかわっていきたい」の２項目については、それぞれに関連すると考えられる研修２後アンケートの２項目「学校評価を通して幼稚園のために役にたてるのは意義あることだ」「これからも幼稚園の応援団として学校評価に関わりたい」の得点の平均値を算出し示した（表２-３-７）。幼稚園のために役に立てることの意義の認知、今後も幼稚園にかかわっていきたいという積極性いずれも、高く保たれているといえる。

事前アンケートと研修２後アンケートを比較した結果から、研修２は、学校関係者評価委員の学校関係者評価に関する理解を高め、関係者評価についてよく知らないことからくる不安感を軽減する効果があることが示唆された。

③学校関係者評価を経験することの有効性

２回の研修、学校関係者評価の実施を含めた学校関係者評価プログラムの一連の過程を経験することにより、学校関係者評価委員にどのような変化が生じたかを、事前アンケートの結果と最終アンケートの結果を比較して検討する。また、研修を受けなかったＮ群の事前アンケートとＮ群最終アンケートのデータも比較し、Ｐ群の変化とＮ群の変化の比較も行う。

１）学校関係者評価プログラム参加の有効性の検証

ⅰ）学校関係者評価実施後の幼稚園・幼稚園教育理解の変化

これまでの分析から、研修１への参加後、幼稚園・幼稚園教育の理解が高まったことが示された。では、２回の研修、学校関係者評価の実施を含めた一連の学校関係者評価プログラムに参加したことで、学校関係者評価委員の幼稚園理解度は、最終的にはどのように変化したのだろうか。この点について検討するため、『幼稚園教育理解』得点について、事前アンケートと最終アンケートの平均値を比較する対応のあるt検定を行った。その結果、有意な差が見られ、事前アンケートより最終アンケートの方で得点が高いことが分かった（t(113)=4.492, p<.01)。『学校としての幼稚園理解』得点については、事前アンケートと共通の二つの項目「学校教育における「幼稚園」の位置づけと目的を理解している」「幼稚園の特徴について理解している」について、それぞれ対応のあるt検定を行った。その結果、いずれの項目についても有意差が見られ、事前アンケートより最終アンケートの方で平均値が高くなっていることが分かった（「学校教育における「幼稚園」の位置づけと目的を理解している」：t(116)=3.937, p<.01、「幼稚園の特徴について理解している」：t(115)=2.286, p<.05）（表２－３－８）。

学校関係者評価プログラムの一連の過程を経験した後、幼稚園・幼稚園教育の理解が高まっていることが分かった。

表２－３－８　学校関係者評価実施後の幼稚園理解の変化

	事前アンケート		最終アンケート		
	Mean	S.D.	Mean	S.D.	
『幼稚園教育理解』	3.43	0.80	3.74	0.68	事前＜最終**
「学校教育における「幼稚園」の位置づけと目的を理解している	3.66	0.92	4.00	0.72	事前＜最終**
幼稚園の特徴について理解している	3.80	0.84	3.99	0.69	事前＜最終**

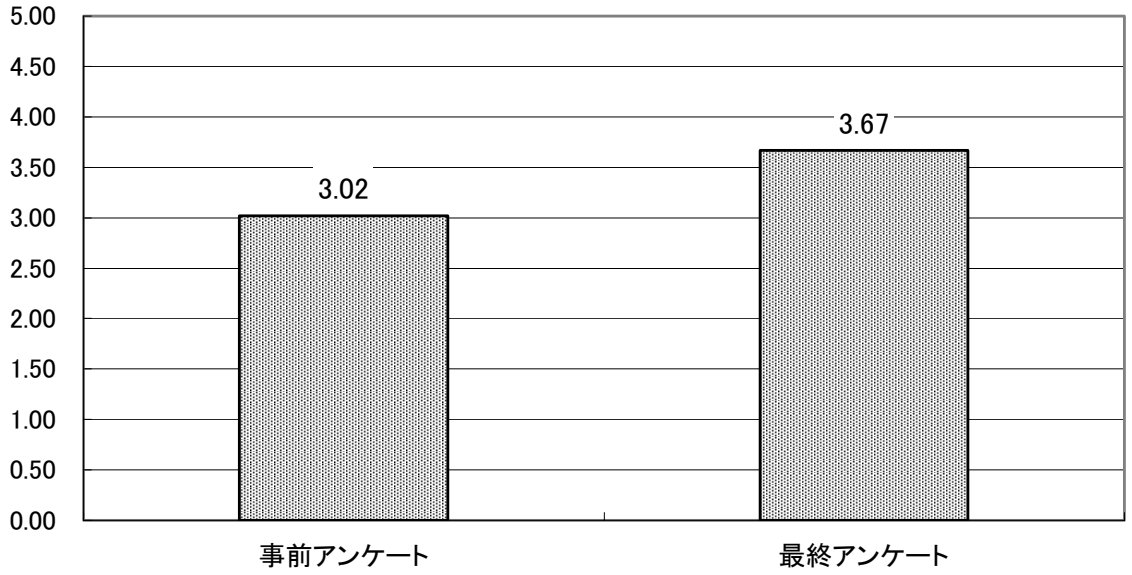
*p<.05

ⅱ）学校関係者評価プログラム参加後の学校関係者評価の理解の変化

これまでの分析で、研修２の後、学校関係者評価委員の学校関係者評価理解が高くなっていることが示された。一連の学校関係者評価プログラムに参加したことで、学校関係者評価委員の学校関係者評価理解度は、最終的にはどのように変化したのかを検討するため、『学校関係者評価理解』得点について、事前アンケートと最終アンケートの得点を比較する対応のあるt検定を行った。その際、事前アンケート項目「学校評価という言葉を知っている」と「幼稚園においても学校関係者評価が行われていることを知っている」の２項目は、最終アンケートと共通ではなかったため、事前アンケートについても最終アンケートについても、この２項目を除いた残り７項目の得点を足し合わせ、項目数で除算した得点を算出し、比較に使用した。その結果、有意な差が見られ、事前アンケートよりも最終アンケートで平均値が高くなっていることが分かった（t(109)=8.236, p<.01、事前3.02(.88)＜最終3.67(.70)）（図２－３-15)。学校

関係者評価プログラムを経験した後、学校関係者評価理解が高まっていることがわかった。

図２-３-15 学校関係者評価プログラム実施後の学校関係者評価理解の変化



iii）学校関係者評価プログラム参加後の学校関係者評価にかかわる感情の変化

学校関係者評価プログラムを経験することで、学校関係者評価委員の学校関係者評価にかかわる感情が変化したかどうかを検討するため、学校関係者評価にかかわる不安感、負担感、意欲等に関する９項目について、対応のあるt検定により最終アンケートとの比較を行った。その結果、「「学校関係者評価についてよく知らないので不安である」「評価をする立場に責任感を感じた」「幼稚園や幼児が身近になるのがうれしい」「学校関係者評価は負担が重そうである」の４項目に有意差が見られ、「学校関係者評価についてよく知らないので不安である」「評価をする立場に責任感を感じた」「学校関係者評価は負担が重そうである」については事前アンケートより最終アンケートの平均値の方が低く、「幼稚園や幼児が身近になるのがうれしい」については事前アンケートより最終アンケートの方で平均値が高くなっているのが分かった（表２-３-９）。なお、事前アンケート項目「幼稚園をよりよくするために役にたてるのは意義あることだ」については、関連すると考えられる最終アンケート項目「学校評価を通して幼稚園のために役にたてるのは意義あることだ」とともに、平均値と標準偏差を示した。いずれも4.2以上と比較的高い数値となっている。学校関係者評価プログラムを経験した後、関係者評価に関する不安感・負担感は下がり、幼稚園や幼児とのかかわりをポジティブにとらえる気持ちが高まったこと、幼稚園のために役に立つことに意義を感じる気持ちは高く維持されたままであることがわかった。

表２-３-９　学校関係者評価実施後の関係者評価にまつわる感情の変化

	事前アンケート		最終アンケート		
	Mean	S.D.	Mean	S.D.	
幼稚園をよく知らないので不安である	2.27	0.97	2.17	0.80	n.s.
学校関係者評価についてよく知らないので不安である	2.95	1.13	2.43	0.87	事前＞最終**
評価をする立場に責任感を感じた	3.97	0.81	3.79	0.94	事前＞最終*
幼稚園や幼児が身近になるのがうれしい	3.96	0.85	4.16	0.67	事前＜最終*
学校関係者評価は負担が大きそうである	3.05	1.02	2.79	0.98	事前＞最終*
これをきっかけに今後も幼稚園と関わっていきたい	3.99	0.69	3.98	0.71	n.s.
学校関係者評価委員として適切な評価を行う自信がある	2.68	1.02	2.63	0.93	n.s.
学校関係者評価委員になるのは気が重い	3.02	0.79	3.03	0.75	n.s.
幼稚園をよりよくするために役に立てるのは意義あることだ	4.39	0.60	-	-	-
学校評価を通して幼稚園のために役に立てるのは意義あることだ	-	-	4.20	0.661	-

**p<.01

*p<.05

事前アンケートと最終アンケートを比較した結果から、一連の学校関係者評価プログラムを経験した後、学校関係者評価委員の幼稚園・幼稚園教育に関する理解、学校関係者評価に関する理解が高まること、関係者評価にかかわる不安感・負担感が軽減すること、幼稚園や幼児とのかかわりをポジティブにとらえる気持ちが高まることが示唆された。この結果からは、学校関係者評価プログラムの効果がある程度確認されたといえるだろう。

２）Ｎ群における学校関係者評価経験後の変化の検証

研修プログラムを受けないＮ群は、各幼稚園が設ける学校関係者評価委員会において、園が独自に行なう幼稚園や幼稚園教育、学校関係者評価についての説明を受け、実際の評価に臨んでいる。こうした一連の学校関係者評価過程に参加した経験が、委員にどのような変化をもたらしたのかを検討する。

ｉ）Ｎ群の学校関係者評価委員の幼稚園・幼稚園教育の理解の変化

Ｎ群の学校関係者評価委員の、幼稚園・幼稚園教育についての理解がどのように変化したかを検討するため、『幼稚園教育理解』得点について、事前アンケートとＮ群最終アンケートの平均値を比較する対応のあるt検定を行った。その結果、有意な差が見られ、事前アンケートより最終アンケートの方で平均値が高くなっていることが分かった（t(106)=8.282, p<.01、事前3.38(.69)＜最終3.89(.56)）（図２-３-16)。『学校としての幼稚園の理解得点』については、プログラム群（Ｐ群）の場合と同様の２項目についてそれぞれ対応のあるt検定を行なった。

その結果、いずれについても有意な差が見られ、事前アンケートより最終アンケートで平均値が高くなっていることがわかった（「学校教育における「幼稚園」の位置づけと目的を理解している」：t(108)=4.859, p<.01、事前3.62(.98)＜最終4.09(.73)、「幼稚園の特徴について理解している」：t(109)=5.243, p<.01、事前3.68(.90)＜最終4.12(.70)）（表２－３-10）。

図２－３-16 Ｎ群 学校関係者評価実施後の幼稚園教育理解の変化

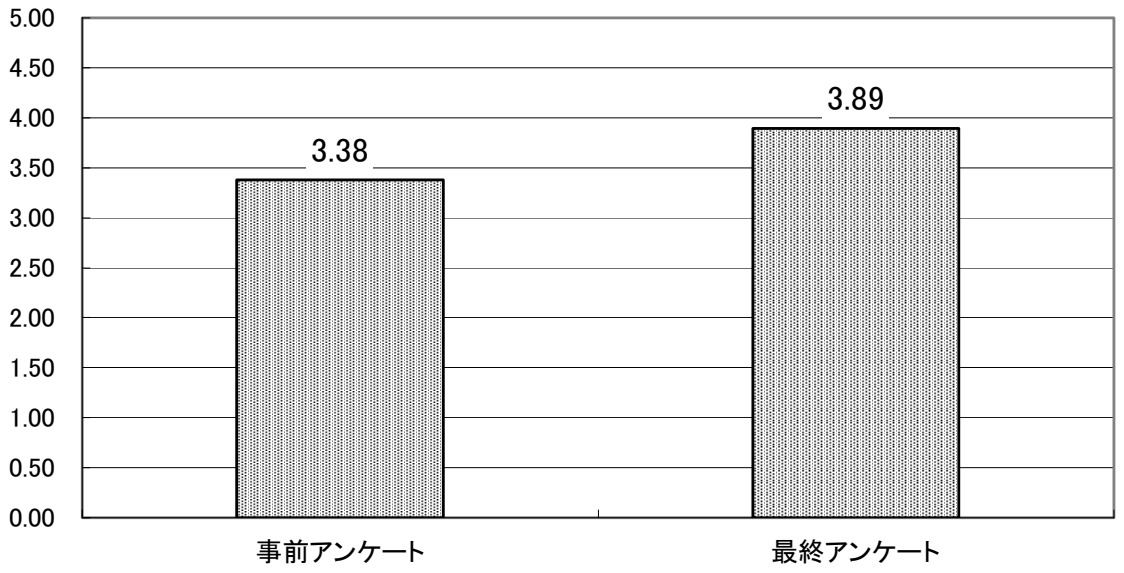


表２－３-10　Ｎ群 学校関係者評価実施後の幼稚園理解の変化

	事前アンケート		最終アンケート		
	Mean	S.D.	Mean	S.D.	
『幼稚園教育理解』	3.38	0.69	3.39	0.56	事前＜最終**
学校教育における「幼稚園」の位置づけと目的を理解している	3.62	0.98	4.09	0.73	事前＜最終**
幼稚園の特徴について理解している	3.68	0.90	4.12	0.70	事前＜最終**

**p<.01

ii）Ｎ群の学校関係者評価委員の学校関係者評価の理解の変化

Ｎ群の学校関係者評価委員の学校関係者評価についての理解がどのように変化したかを検討するため、『学校関係者評価理解』得点について、事前アンケートとＮ群最終アンケートの平均値を比較する対応のあるt検定を行った。プログラム群（Ｐ群）の場合と同様の７項目を用いて得点を算出し、比較に使用した。その結果、有意な差が見られ、事前アンケートより最終アンケートの方で平均値が高くなっていることがわかった（t(99)=9.341, p<.01、事前3.01(.94)＜最終3.85(.64)）（図２－３-17）。